2018.02.01(木)
建築史系
修士論文発表会

旧渡辺甚吉邸に見る日本的プラグマティズム

- 近代日本建築との相克 -

中谷礼仁研究室
住宅の建て方勉強会
修士２年　野村渉

目次

・資料編
・本編
研究背景
研究目的
研究方法 / 既往研究
　目的【1】について
　目的【2】について
既往研究

1. 旧渡辺甚吉邸に関する基礎情報
　1-1. 建物について
　1-2. 建設経緯
　1-3. 関連人物について
　1-4. 小結

2. 近代 日本 建築
　2-1. はじめに
　2-2. 西洋の「近代」建築
　　2-2-1. 新たな建築理念
　　2-2-2. モダニズムについて
　　2-2-3. モダニズム建築の波及
　　2-2-4. 近代住宅
　2-3. 日本のモダンデザイン - 表現と創造 -
　　2-3-1. 建築運動の表現派
　　2-3-2. 建築の 1930 年代
　2-4. 日本的近代合理主義 - 経済性と便利さ -
　　2-4-1. 耐震技術偏重
　　2-4-2. 官庁営繕の合理化
　2-5. 近代日本建築の形態の分類
　2-6. 小結：視点の転換 - アメリカへ -

3. 近代と住宅の合流
　3-1. はじめに
　3-2. 明治の邸宅
　　3-2-1. その背景
　　3-2-2. 和洋館併置型住宅
　　3-2-3. 和洋折衷という考え方
　3-3. 中流住宅の発生と変容
　　3-3-1. 在来住宅批判
　　3-3-2. 中廊下型住宅
　　3-3-3. 居間中心型住宅
　3-4. 大正から昭和初頭にかけての住宅観
　　3-4-1. 住宅の改良について
　　3-4-2. あめりか屋のバンガロー
　　3-4-3. 住宅改良会
　　3-4-4. 山本拙郎という建築家
　　3-4-5. 生活改善同盟会
　　3-4-6. 上からの生活改良
　3-5. 近代日本建築との相克：日本的ﾌﾟﾗｸﾞﾏﾃｨｽﾞﾑ
　　3-5-1. 行為主義の建築家たち
　　3-5-2. 昭和型洋館の系譜
　3-6. 小結：功利主義の価値体系

4. 日本的ﾌﾟﾗｸﾞﾏﾃｨｽﾞﾑの結実としての旧渡辺甚吉邸
　4-1. 内部のﾌﾟﾗｸﾞﾏﾃｨｽﾞﾑ
　　4-1-1. ステンレス流し台の発見
　　4-1-2. 百貨店家具部門の仕事
　4-2. 設計者の底流
　　4-2-1. 早稲田大学　生活への眼差し
　　4-2-2. 山本と今の中世観
　4-3. 旧渡辺甚吉邸の完成
　　4-3-1. チューダー様式
　　4-3-2. 今和次郎『感想』
　　4-3-3. 遠藤健三『渡邊邸新築に就て』
　4-4. 小結：その早すぎた出現

結論
　付録 / 参考文献 / 出典 / 謝辞

研究背景

図 1. 旧渡辺甚吉邸外観

2017/6/19-7/7 にかけて、早稲田大学・法政大学・神奈川大学の三大学合同で『旧渡辺甚吉邸』の実測調査が行われた。本建築は、1934 年に現港区白金台に建てられた個人邸宅である。ハーフティンバーを基調としたチューダー様式が特徴で、設計には『あめりか屋』の元技師・遠藤健三（実施設計）、同元技師長・山本拙郎（全体計画）、考現学者・今和次郎（細部装飾）の三名が参加した。当時における、住宅設計への最高の知見を有した三名が手掛けた史的価値の高い建築であるにも関わらず、未だ正当な研究による史的意義が見出されていない。

図 2. 遠藤健三 (1898-1992)

図 3. 山本拙郎 (1890-1944)

図 4. 今和次郎 (1888-1973)

竣工当時の情報 注1

起　　工 ： 昭和 8(1933) 年 6 月 13 日
竣　　工 ： 昭和 9(1934) 年 12 月 12 日
所 在 地： 芝區白金三光町二七三番
設　　計 ： エンド建築工務所設計部 (遠藤健三)
　　+ 山本拙郎 (全体計画)/ 今和次郎 (細部装飾)
施　　工 ： エンド建築工務所
構　　造 ： 木造地上 2 階 / 塔屋 /RC 造地下 1 階
規　　模 ： 延床面積 603.9 ㎡ / 敷地面積 802.6 ㎡
規模内訳： 地下 (地階)48.8 ㎡ /1 階 (壹階)300.8 ㎡
　　/2 階 (貳解)186.8 ㎡ /3 階 (屋階)21.51 ㎡
　　/4 階 (塔屋)12.9 ㎡ガレージ 33.1 ㎡ 3

研究目的

【1】実測調査結果・既往の文献・一次資料を用いて建築上の特徴を整理すること

【2】旧渡辺甚吉邸の価値を近現代の文脈の中で新たに確立すること

研究方法

【1】について...資料編を編纂する。また、本論において設計者三名の建築観と旧渡辺甚吉邸の評価基軸を明らかにし、その補填とする。現在確認できる一次資料は以下の通りである。

合資会社エンド建築工務所東京支店『渡邊邸』(九段寫眞研究所 ,1932) 注2

...旧渡辺甚吉邸の竣工記念誌。細部の仕様、関連業者、設計者の書簡などが収録されている。私家版のため市場流通は無し。

図 5. 渡邊邸

『TUDOR HOMES OF ENGLAND』
『TUDOR HOMES OF ENGLAND』(Architectural Book Publishing Company, New York,1929)

遠藤がチューダー様式のデザインを練る際に参照した図集。京都の W.M.ヴォーリズが『旧下村正太郎邸』を設計する際に参考にした書籍と同じものを輸入した。

図 6. TUDOR HOMES OF ENGLAND

今和次郎の手によるもの 注3

今がデザインしたカトラリー一式 / 試作に用いた石膏型 / 椅子 / 今が設計したインテリアのスケッチの実物がそれぞれ現存している。

図 7. カトラリー一式

図 8. 石膏型

図 9. 椅子

図 10. スケッチ

また、『旧渡辺甚吉邸』のメディア掲載履歴は以下の通りである。

1.『日本の建築家 (私の発見した建築家 遠藤健三)』(新建築社 ,1981.12)
2.『季刊銀花 58 号』(文化学園文化出版局 ,1984)
3. 藤森照信『建築探偵の冒険 東京篇』(筑摩書房 ,1986)
4. 建築文化『近代日本、建築家の足跡 デザイナーとしての今和次郎』(彰国社 ,1990.2)
5.『今和次郎採集講義』(青幻舎 ,2011)
6. 山本正之 / 阿木香 / 日野永一 / 新見隆『日本タイル博物誌』(株式会社 INAX,1991)
7.「 http://www.gifu-np.co.jp/tokusyu/gifu_zaikaijin/gz20130514.shtml 」
百折不撓ぎふ財界人列伝 渡辺甚吉 (下)(2018.1.26 閲覧)
8. 凱風舎 編『日本の建築・土木ドローイングの世界』(大成建設 ,1997)
9. 内田青蔵『拙先生絵日記』(住まいの図書館出版局 ,1993)
10. 東京都教育庁生涯学習部文化課『東京の近代洋風建築 (第 2 次) 調査報告』(東京都教育委員会 ,1991)
11. 日本建築学会『総覧 日本の建築 3 東京』日本建築学会 (1987)

以上の資料に、2017 年度の実測調査の成果を加える。

【2】について...旧渡辺甚吉邸の設計者三名の建築観を規定しているのがアメリカ発祥の「プラグマティズム」であると仮定し、その読解を試みる。また、その過程で、1934 年前後の日本の近代建築とのコンテクストの違いを明らかにする。

論文構成

【第一章】⇒旧渡辺甚吉邸基礎情報
【第二章】⇒戦前日本の近代建築成立の特殊性
【第三章】⇒戦前日本の中流住宅の変容の敷衍
【第四章】⇒第二章・第三章を相対として、旧渡辺甚吉邸を構成する建築観を考察。その史上での意義を確立する

常に持つ視座として、史上に潜航するアメリカ性に着目。第二章では主に西洋建築と日本の建築の合流の過程を扱うが、第三章では、特にアメリカからの影響が強くあらわれた中流住宅の変遷を扱う。そして中流住宅の発展に大きく寄与した三人の建築家、橋口信助・藤井厚二・W.M.ヴォーリズが共通して持っていた、< 在来生活の改良 >,< 啓蒙書の発行 >,< 科学的論拠 > という三点からなる活動形態が、プラグマティズムの姿勢として成立することを通して、第四章でその援用を通じて設計者三名に通底するさらなる価値観を探っていく。

既往研究

旧渡辺甚吉邸を研究対象として取り扱った事例は存在しない。

作家論は、以下が挙げられる。

山本：内田青蔵『拙先生絵日記』(住まいの図書館出版局 ,1993)/ 富士見町教会編『富士見町教会旧会堂のこと』(日本基督教団富士見町教会 ,1985)
今：川添登『今和次郎 - その考現学』(リブロポート ,1987)/ 黒石いずみ『建築外の思考 - 今和次郎論』(ドメス出版 ,2000) を筆頭に多数
遠藤については、建築家としての経歴の短さや、業務は施工管理業を主としたことから、これまで研究対象にされたことはない。

方法論として、日本の建築及び建築家にプラグマティズムを見出して論を試みたのは、

・明石信道『日本の建築家とプラグマティズム』(一般社団法人日本建築学会「建築雑誌 ,1954)

があるが、プラグマティズムの視点の提供と説明にとどまっている。

また、**川崎衿子『洋風住宅に投影されたプロテスタントの家庭光景』(国際日本文化研究センター「日本研究」,2005)** は、橋口信助・西村伊作・W.M.ヴォーリズがアメリカを経て得たプロテスタントの思想が、彼らの住宅設計にどう関与しているかを論じたものである。着眼点の類似を確認できる。

プラグマティズムについて 注4

プラグマティズムは、およそ 1870 年代にマサチューセッツのケンブリッジで、『形而上学クラブ』という同人の合作として生み出された。それは、純米国産の数少ない哲学で、「考えは行為の一段階」という主張のもとに展開される志向のことを指す。実験的経験の創造性を是とする。
プラグマティズムを成立させるのは、倫理と論理と心理の基準を持った、それぞれ「功利主義的傾向」「実証主義的傾向」「自然主義的傾向」の三つの概念である。三点を網羅するのがプラグマティズムの特徴。以下は筆者の解釈に基づく図。

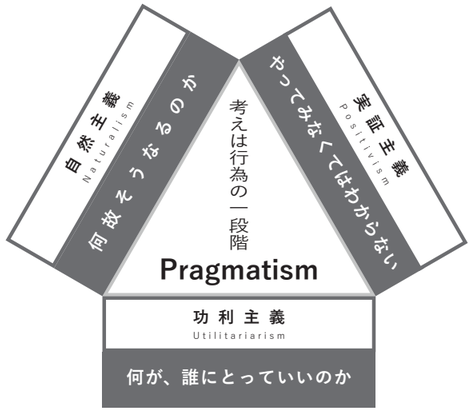

図 11. プラグマティズム概念図

アメリカ由来のプラグマティズム

鶴見俊輔は、「訳語のことをいうと、従来の「実用主義」という呼称には、プラグマティズムのただ一つの底辺（功利主義的傾向）だけを連想させる傾きがあり、適当でない。この思想の特色は、プラグマ（行為）という観念を抱いて三つの傾向が組み合わされているところにあるので、しいて訳語を求めるならば「行為主義」と呼ぶのが適当と思う。」とした。(下線 / 筆者加筆)

研究成果

：資料編

目次

①竣工当時の古写真
②旧渡辺甚吉邸仕様リスト
③2017 年 -1934 年の比較写真リスト
④今和次郎のスケッチと実物の比較リスト
⑤「渡邊邸工事概要」及び遠藤と今の書簡

竣工記念誌を底本として、2017 年度の調査成果を用いて情報を補った史料

①45 枚の古写真を収録

②場所ごとの素材と仕上げを写真とともにリスト化 (中谷研 政本悠紀との共同研究)

③2017 年時点での様子を遺す比較写真リスト

④今和次郎のスケッチと製品の比較リスト (今和次郎関連の史料としても活用を期待できる)

⑤は文字を起こしただけのものなので割愛

：1 章　旧渡辺甚吉邸に関する基礎情報

図 12. 渡辺甚吉 (1906-1972)

旧渡辺甚吉邸は、大学を卒業した直後の渡辺が、当時の富裕層の例に倣って欧州遊学に出かける際 (昭和 5 年～ 6 年にかけて)、同郷の馴染みであった遠藤を伴ったことに由来して建設されている。遠藤は早稲田工手学校建築科を大正 6 年に卒業し、5 年間あめりか屋で施工業に従事した後、久留米 (大正 11~)⇒岐阜 (大正 14~) の順番で自身の工務店を構え活動している最中の出来事であった。

遊学後、渡辺の新婚生活のための住宅の設計者には自然、遠藤が選ばれ、同行した遊学先でともに見たイギリスのチューダー様式をそのデザインに採用したという。遠藤は、大学と会社の先輩であった山本と、彼らの恩師であった今を誘って「これ限りのつもりで豪華メンバーをそろえた。[注5]」。また、遠藤と渡辺に関しては、紳士録や、彼らの故郷である岐阜のローカルメディアから新たに情報を得ることができた。

：2 章　近代 日本 建築

西洋のコンテクストと乖離した西洋由来の工法や様式が日本独自の近代思想と合流した時、その歪んだ受容によって「近代日本建築」が生まれた。その成立背景を敷衍し、近代日本建築を①表現派、②モダニズム、③帝冠様式、④日本回帰様式、⑤折衷主義様式の五つへと分類した。

一方で、横河民輔や渡辺節らによるアメリカ建築の導入が開始されており、大正期から昭和初期にかけて展開される中流住宅において特にそれが顕著であった。

：3 章　近代と住宅の合流

明治末期、都市計画と住宅問題に日本人建築家が意識を割き始めたころ、倒幕以来増え続けてきた都市の中流知識層は、自らの手によって在来住宅の改良運動を始めていた。その発展に大きく寄与したのが、アメリカ帰りの橋口信助が、「組み立て住宅」を持ち帰って興した『あめりか屋』≒『住宅改良会』であった。

『あめりか屋』は日本最初期の住宅供給業、『生活改良会』は在来生活改善の啓蒙活動をそれぞれ展開し、筆者は、そうした橋口の活動はアメリカ由来のプラグマティズムに基づく活動であったことを指摘した。

・建築の素人であった事実⇒実証主義的
・啓蒙雑誌『住宅』の発行⇒実証主義的
・在来生活の打破⇒功利主義的
・動作経済などの科学的論拠の提示⇒自然主義

また、同時期の藤井厚二・W.M.ヴォーリズにもそれぞれ同じ態度を見出すことが出来る。

・彼らはそれぞれ、藤井：『日本の住宅』、ヴォーリズ：『吾家の設計』『吾家の設備』という自身の科学的論拠に基づく住宅改良の指南書を発行している点

・藤井は環境工学的知見から、日本の気候風土に適する住宅の有り方を探し、ヴォーリズは住人の健康面を一義とする台所設備の近代化などを主張した点

以上に基づき、中流住宅の生活改良は、彼らのようなプラグマティストの三つの思想によって推進された。

そしてそれは、アメリカ由来・日本育ちの新たな建築観である、「中流住宅のプラグマティズム」なのであった。

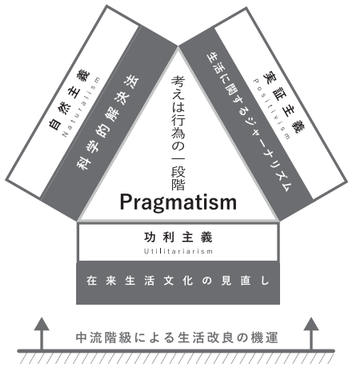

図 13. 中流住宅のプラグマティズム概念図

また、村野藤吾が『日本における折衷主義建築の功禍』で指摘していた、折衷主義建築の「功利的方面」も、一種の日本的プラグマティズムであると仮定した。

特に昭和初期のモダニズムの流行の裏でよく見られる洋館建築について、施主を一義とする「商品建築」であるという立場を見出し、< 施主の生活を重視 >,< 贅を尽くす >,< 施主の要望に即す > という功利・実証・自然主義性を持つ。狭義の「昭和型洋館のプラグマティズム」に基づく建築群であることを指摘した。

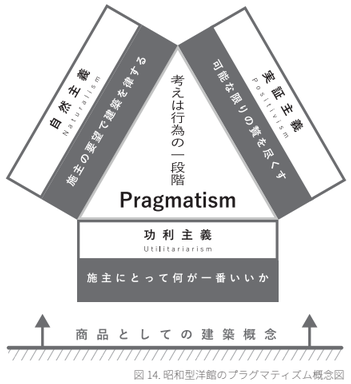

図 14. 昭和型洋館のプラグマティズム概念図

：4 章　日本的プラグマティズムの結実としての旧渡辺甚吉邸

上述を踏まえて、旧渡辺甚吉邸を構成する建築観を考察すると、以下の四点に収斂される。

①『あめりか屋』由来の、台所の近代設備から読み取る「中流住宅のプラグマティズム」

その内実は、ドイツで生まれたフランクフルトキッチンのように、テイラーシステムに則って、矩形平面の壁沿いに設備を配置する計画 >,< 調理台の前の巨大な開口 >,< 換気扇やガスコンロなどの近代設備 >,< 特に配膳室に見られる、同一規格の複数の引き出しを備えた収納棚 > などに示される。

そして、流し台には日本最初期の使用例であるステンレススティールが使用されている。

図 16. 配膳室

図 17. 台所

こうした点から、まず『あめりか屋』由来の功利主義・自然主義を特に強く備えたプラグマティズムを発見できる。

② 柳田國男⇒佐藤功一⇒今和次郎によって築かれた、人々の「生活」に着目する自然主義的思想

山本と遠藤と今は、大正 5 年から 6 年にかけて、早稲田大学建築科に同時期に在籍していた (今は講師としての立場)。当時の早稲田大学は、佐藤功一が日本で初めて「住宅」を題材にしたカリキュラムを導入したばかりの気鋭の新設校である。佐藤が住宅への視座を持ち得たのは、柳田國男の風景論「風景を形作るのは人間と自然の交渉 = 生活」という自然主義による影響であった。

山本は後に、佐藤のあとを継いで東京女子高等師範学校講師で住居学の講師を務めるなど、柳田⇒佐藤⇒今と、草創期の早稲田で連綿と受け継がれてきた、自然主義的な「生活」の視座に特に強く影響を受けた一人であった。

③ キリスト教的ヒューマニズム[注6] = 中世主義 / 功利主義的思想

山本拙郎『ある提案』、今和次郎『復興都市の建築美』が顕著に示すように、彼らは、設計活動における「内から発する人間味の肯定 = ヒューマニズム」的思索を備えていた。

それは中世の工匠たちの制作と労働に対する姿勢を芸術の理想とした、ジョン・ラスキンやウィリアム・モリスに通ずる中世主義の系譜と言える。そうした思索との連関のもと、山本、今がクリスチャンであった事実が、「最大多数の最大幸福」を主とする功利主義との結びつきを感じさせる。

④ 「商品建築」性から見る「昭和洋館型のプラグマティズム」

旧渡辺甚吉邸の精緻な家具装飾は、三越の家具部門によって製作されており、戦時統制による家具の単純化や代理用品化が始まる前の最後期に位置する作品群であると言える。

家具製作の技術と様式理解を最前で推進してきた三越家具の技術が完成された時期の貴重なものである。施主の渡辺甚吉は、自身の山の良材を提供したそうで、まさに施主のために贅を尽くした「商品建築」の粋であった。

図 18. 応接室のマントルピース

：結論

以上を踏まえ、①によって得られた近代的で合理的な生活空間 /③によって高い完成度を誇る、名もなき工匠が作り上げた中世イギリスの民家を範に取ったチューダー様式 /①と③を律する価値観としての②/①～③を実現し得た建築家としての姿勢④によって、旧渡辺甚吉邸は構成されている。

こうした今日としてはオーソドックスな「最新設備」「施主の要望通りに」「快適な生活を」といったプラグマティックな住宅設計の価値観は、早すぎる段階で旧渡辺甚吉邸を先端とする建築群によって提出されていたのである。

プラグマティズムの視座によって、松ノ井覚治をはじめとしたアメリカ帰りの住宅作家への注目を今後の展望としたい。

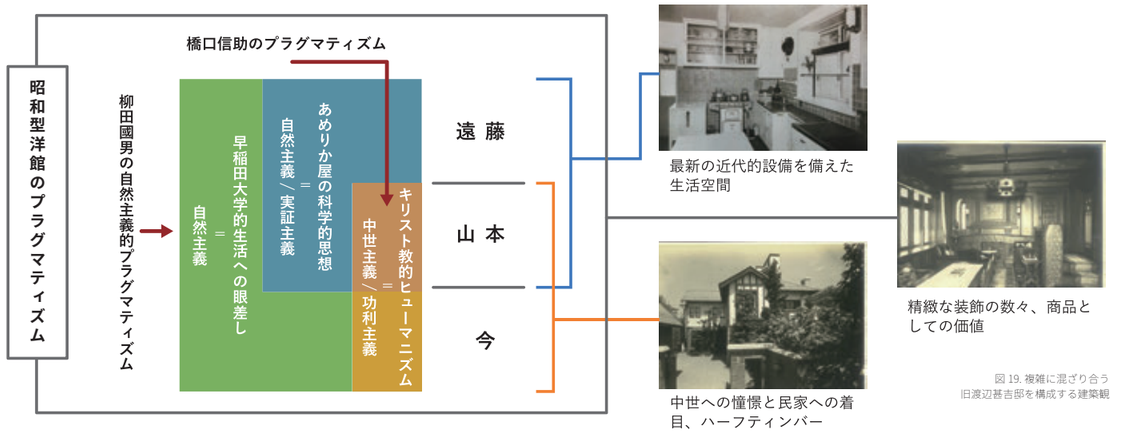

図 19. 複雑に混ざり合う旧渡辺甚吉邸を構成する建築観

画像出典：図 1：筆者撮影 / 図 2：遠藤健三「http://rotary-bunko.gr.jp/pdf/238/238_02-01.pdf」冊子『温故知新（ロータリーの今昔）』より (2017.7.23 閲覧)/ 図 3：山本拙郎「http://archives.cf.ocha.ac.jp/exhibition/TTI_377/a_ph_377901511934-0047.html」お茶の水女子大デジタルアーカイブズより (2017.723 閲覧)/ 図 4：今和次郎「http://www.aomori-museum.jp/ja/exhibition/41/」青森県立美術館今和次郎採集講義より (2017.7.23 閲覧)/ 図 5：筆者撮影 / 図 6:『TUDOR HOMES OF ENGLAND』(Architectural Book Publishing Company, New York,1929) より / 図 7-10：早稲田大学建築史研究室所蔵 / 図 12：http://www.gifu-np.co.jp/tokusyu/gifu_zaikaijin/gz20130514.shtml」百折不撓ぶ財界人列伝 渡辺甚吉 (下)(2018.1.26 閲覧)/ 図 16,17：合資会社エンド建築工務所東京支店『渡邊邸』(九段寫眞研究所 ,1932)/ 図 18：筆者撮影 / 図 11,13,14,19：筆者作成

注 1：合資会社エンド建築工務所東京支店『渡邊邸』(九段寫眞研究所 ,1932) より
注 2：工学院大学 今和次郎コレクション所蔵
注 3：早稲田大学建築史研究室所蔵
注 4：鶴見俊輔『アメリカ哲学 戦後日本思想史の原点』(こぶし書房 ,2008) を底本として使用
注 5：『日本の建築家 (私の発見した建築家 遠藤健三)』(新建築社 ,1981.12) より
注 6：長谷川堯『都市廻廊』(相模書房 ,1975) を底本として参照